日本一の加曽利貝塚
－世界的な“文化”を守ろう－

武田宗久

破壊寸前の運命

開発ブーム早急な保護望まれる

加曽利貝塚が最近国土開発ブームにのって、その大部分が一工場の敷地として買収され、間もなく破壊される運命にあるという事態に対して、これをいかにして保存するかの問題は、先般来、国会、県、市会においても論議の対象となったのであるが、その具体策はいまだ決定的なものが講じられていないようである。

いったい貝塚は古代人が食料とした貝殻などの残物を捨てた場所である。だから、こんなごみ捨て場をなんで保存するかというかもしれないが、実はその下に当時の住居の跡が埋蔵されている場合が多いのである。貝塚は日本に約3000ヵ所、そのうち千葉県には約250ヵ所ほどあって全国最高の比率を示し、ことに浅海砂泥性の東京湾沿岸の台地のへりに大規模なものが分布している。市川市堀ノ内貝塚、姥山貝塚、曽谷貝塚、千葉市園生貝塚、こて橋貝塚、貝塚町貝塚、加曽利貝塚などは代表的なもので、これらは縄文（じょうもん）式時代の海岸住民が住んでいた大集落遺跡である。

堀ノ内、姥山両貝塚は東京に近い関係もあって盗掘、乱掘がおびただしく、もやは保存に耐えない。曽谷貝塚は最近県営水道工事のため中心部がぶちぬかれてしまった。園生貝塚は地質学的先史地理学的調査のために切断された。こて橋、貝塚町貝塚は道路拡張工事のために破壊された部分が多い。以上のとおり縄文式時代の遺跡の宝庫とまでいわれた千葉県の大貝塚は最近の数年間まったく変ぼうし、ひとり加曽利貝塚のみが比較的あらされずに旧態を保存し続けてきたのである。

加曽利貝塚の規模は日本一である。面積約66,000平方メートル、南北およそ600メートル、東西およそ300メートルの地域にまたがる二つの環状貝塚が8字形に並び前記の各貝塚の約2倍の面積を占めている。東京大学教授江上波夫博士はこの貝塚を評して「加曽利貝塚は日本よりも世界的に著明な貝塚で、それが現在まで比較的にあらされずに旧態を保存し続けてきたことはほとんど奇跡に近い」と講演している。（6月21日「加曽利貝塚と保護」）加曽利貝塚は縄文式時代における日本最大の原始集落遺跡なのである。

加曽利貝塚研究の歴史はかなり古い。日本における科学的な考古学は、明治12年に米人モールスが東京都大田区にある大森貝塚を発掘したときに始まるとされているが、加曽利貝塚の名が学界に紹介されたのは明治20年のことで上田英吉の「下総国千葉郡貝虚記」（東京人類学会

雑誌２巻19号）の中にでている。その後、明治40年に東京人類学会は第３回の遠足会を加曽利貝塚に行なった。このときの参加者は坪井正五郎、大野雲外、江見水陰など30数人で帰途坪井正五郎は「貝塚にかくも広大な所があろうということを確かめたのからして、すでに知識上の獲物」は大きかったと述べている。このとし、坪井正五郎、石田収蔵、松村瞭による発掘が行われ、人骨が発見された。さらに大正11年には小金井良精、松村瞭、大山柏らによる試掘がなされ、実測図が作られた。またその翌年には上羽貞幸が人骨を発掘している。

このように当時の人類学会のおもな目的は人骨を採掘して測定することにむけられていた。大正13年の東京大人類学教室による発掘もまたこのためであった。これは３月24日から４月３日まで行われ、小金井良精、松村瞭、山内清男、八幡一郎、甲野勇らが参加し、大山柏の作った実測図にもとづいてＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ地点が選ばれ、人骨のみならず遺物の層位による研究が行われた。「この結果Ｂ、Ｄ地点から計３体の人骨を発見したほか、発掘によって私たちは直感的にＢ地点発見の土器とＥ地点発見の土器とが趣を異にしていることを知った。そしてＢ地点の黒かっ色土層の中からもＥ地点発見の土器に似たものがときどき現れた。Ｅ地点付近表面に散布する土器とＢ地点付近地表面に散布する土器を拾って見ても大体異なった性質のものであることは察せられた。そしてＥ地点からは黒曜石（こくようせき）の砕片やその石で作った石鏃（せきぞく）がおびただしく発見されるのに、Ｂ地点には黒曜石などはほとんどないといってよい。なぜだろう。この興味ある問題にぶつかって、私たちの気分は極度に緊張した」（八幡一郎「千葉県加曽利貝塚の発掘」人類学雑誌39巻４、５、６号）。このようにしてＢ地点の貝層下にある黒かっ色土層中に含まれ、土器に似たるものはＥ地点においては表面に散布するという事実を知り、これは時間的な差による土器型式の変化であることを確かめたのである。これが縄文式土器の編年研究の端緒であって、その後市川市姥山貝塚、堀ノ内貝塚、松戸市上本郷貝塚などの発掘を経て昭和12年ごろ、一応の大系が樹立された。山内清男は「下総上本郷貝塚」（人類学雑誌43巻10号）の中で「加曽利貝塚の発掘は、土器型式の内容決定層位的事実、年代的考察に向かってぼくらを躍進せしめた。加曽利Ｅ地点の土器、加曽利Ｂ地点貝塚発掘の土器は各個別の一型式とみとめられ爾後、地点の名称はそれぞれの型式を指示することばとなった」と述べているように加曽利Ｅ式、加曽利Ｂ式の名称がつけられ、前者は縄文式時代の中期末に、後者は後期の中葉に位置づけられたのである。つまり加曽利貝塚は縄文式土器の編年研究史上記念すべき貝塚なのである。

加曽利貝塚の特色は巨大な８字形を呈する二つの環をもっている点にある。つまりドーナッツを南北に二つ並べたような格好をしているが北方の環は、いまから約5,000年前後、南北の環は約4,000年前後にできたもので北方と南方の環状集落ではその成立年代に1,000年近い隔たりがあると推定されている。これは決して架空な計算ではない。昭和24年日本考古学研究所で市川市姥山貝塚を発掘した。その際、加曽利Ｅ式と加曽利Ｂ式の中間に設定されている堀ノ内

式土器を伴う住居跡中にあった炭化した梁の破片をシカゴ大学原子核研究所のリビー博士に送って放射性炭素の科学試験を依頼した結果、紀元前2,500年、すなわちいまから約4,500年前という数字を得た。そこで一型式を約500年間とすると加曽利Ｅ式土器は5,000年前、加曽利Ｂ式土器は4,000年前となるのである。

日本のポンペイ

奇蹟的な原始集落遺跡

いったい原始集落といっても、その社会構造は決して簡単なものではなかったはずである。昨年千葉市教育委員会主催で北方の環のごく小部分を２ケ所発掘した結果によると、１ケ所では七軒の竪穴住居跡が重複して発見され、ほかの場所からは６体分の人骨が出た。このことは一集落の中のある部分には住居が密集していてときどき建て変えられ、ある部分には墓地があったことを立証しているのである。おそらくほかに集会場、祭場、土器石器などの工作場、船つき場、防塞施設、そのほかわれわれの想像を越えた何かが埋蔵されているに違いないが、日本ではこのような大貝塚を全部発掘して、当時の原始集落の構造を調べた例は一つもない。文献のない時代のことは考古学的な調査にたよる以外に方法がないのに、これがなされていないのである。したがって加曽利貝塚の場合、ふたつの環状貝塚の全域を買収することは困難だから、重要な部分だけを調査してその一部を保存すればよいではないかという論者があるとすれば、それは集落の構造を理解し得ない意見であって、どこが重要であるかは発掘してみなければわからないのである。まして二つの環は年代のひらきが1,000年もあるとすれば、北方の環と南方の環の中に埋蔵される二つの集落の構造にはかなりの変化があるとみなさなければならない。それを調査して両者の社会構造の内容を比較検討するところにこそ加曽利貝塚の意義があるのである。加曽利貝塚が８字形を呈するのは、以上の点できわめて重要な特色といわなければならない。

すばらしい躍進を続ける日本の現代文化も一朝にして生まれたものではない。遠い原始の昔からわれわれの先祖が営々として築きあげて貴重な遺産の累積のうえに成立していることはいうまでもない。この尊厳な事実を無視するかの如く、なんらの配慮も講ぜられずにすでに多くの埋蔵文化財が破壊され、今後も破壊される運命にある。前述の上本郷貝塚は市域拡張のために、市原郡門前貝塚は住宅地造成のため…。建設という名は日本では何物をも破壊するという魔神の行為である。イタリアのポンペイ遺跡は紀元79年、ナポリの南東方のベスビヤス火山の噴火によって一瞬のうちに埋没されたものであるが、1860年（江戸末期）以後今日まですでに百余年の長期にわたって、計画的な発掘調査が国家の事業として続けられ、ほとんどローマ帝政初期の都市の全ぼうが判明するにいたっている。京大助教授樋口隆康は６月23日号「朝日ジャーナル」で世界の文化財保護対策を紹介し、最近のギリシャ、エジプト、インド、中共が民族の

遺産を守るために大規模な保存措置を講じているのに、日本では加曽利貝塚や大阪の西陵古墳（史跡）のような第一級の遺跡が国土開発の名のもとに破壊寸前の危機にのぞんでいる現状を指摘して、これらはお金にならぬものであるが、金になるものだけが貴いのではなく、金で買えない貴重なものである。それゆえ、このような民族遺産は当然国家がこれを保護すべきであると論じている。

千葉県には多くの埋蔵文化財がある。貝塚、弥生式時代遺跡、古墳、寺院跡、城郭跡等々。これらはいずれも貴重な文化財であるが国土開発のためにはやむを得ず破壊しなければならない場合もある。そこでぜひ保存すべきものは保存し、事前調査をして破壊依然に記録にとどむべきものはとどめるようにリストと法令をつくって早急に実施しなければならない。

千葉県の埋蔵文化財で第一級の遺跡として認められるものの一つに姥山貝塚がある。しかし、これは盗掘乱掘のため保存に耐えない。田子台住居跡もこれを静岡県登呂遺跡と比較すれば、その規模の点で問題にならない。著明な内裏塚や金鈴塚、芝山古墳群にしても日本最大と認める仁徳天皇陵と比較すれば、その４分の１ほどの大きさにすぎない。上総、下総両国分寺も武蔵国分寺の規模にはおよばないのである。以上の点からみても、加曽利貝塚がいかに貴重な遺跡であるかは明白である。千葉県が誇る唯一の日本最大最古の原始集落遺跡が奇蹟的にも比較的よく旧態を保存し続けしかも、考古学史上、加曽利Ｅ式、加曽利Ｂ式の名は教科書はもちろん、世界の学界に不滅の名をとどめているのである。立教大学講師岡本勇は「加曽利貝塚の意義」（考古学10巻１号）の中で「日本の考古学の歩みをうつしだすかのような、長い研究の歴史をもち、最大の規模を備え、標準遺跡としての名誉を有する加曽利貝塚は、どうしても守りぬかねばならない。われわれの学問上の現段階的な課題に取り組むことも、もちろん切実に必要ではあるけれども、そのまえにこの貝塚を破壊から守ることは、それ以上に尊厳な任務である」と。

日本で埋蔵文化財の保護の問題が大きく取り上げられたのは、昨年の平城宮跡と難波宮跡の場合である。前者は近鉄がそこの一画に検車区をつくるためであり、後者は大阪府が国有地に検察庁、教習所等の合同庁舎を設立するためであった。しかし、これは地元の保存運動が猛然として起こり、大きな波紋のように全国におよんだ結果、国、県、を動かした。結局、平城宮は国が38年度文教予算４億2600万円を支出して買収し難波宮跡は大阪府の提供した代替え地を史跡に指定したのである。日本の宮殿跡でさえ保存運動をおこさないかぎり守り得ないとは？これでも日本は世界の文化国家といえるのであろうか。しかし静かに思いをいたすとき、平城宮や難波宮は記録にも残り、大体の規模構造は推定することが可能である。ところが記録以前の世界、階級未分の時代の村落の構造はまったく不明のままに破壊しつくされようとしているのである。一方はなやかな宮殿跡であり、他方は土くさい民衆の社会であるが、一体どちらがたいせつな埋蔵文化財であろうか。東京大学付属資源科学研究所員和島誠一は「日本の場合、

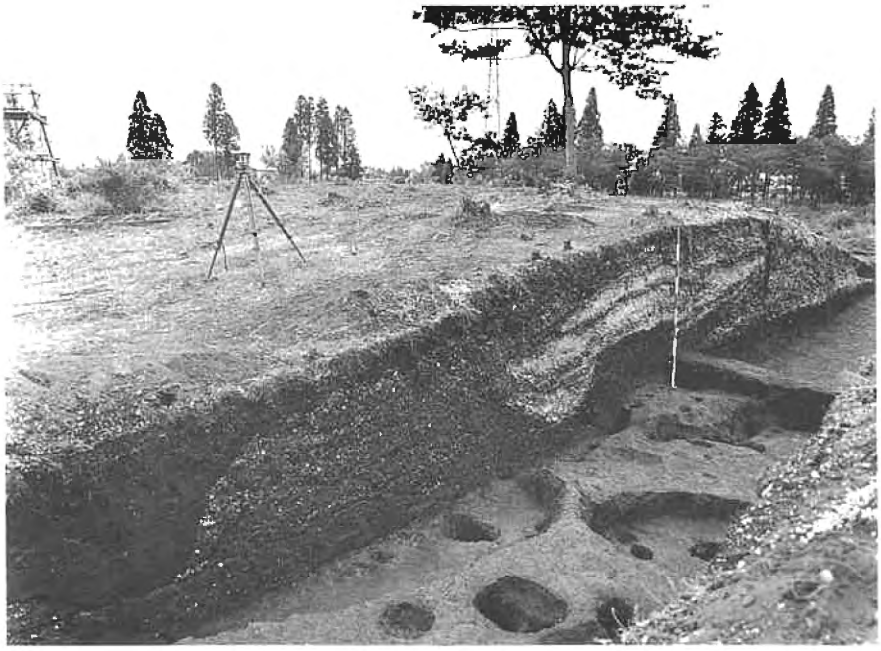
普通の土壌では人骨は消滅してしまうが、貝塚の下には人骨が並んで出てくる場合が多い。それらは当時の共同墓地で、その葬り方に当時の社会状態や死にたいする観念が反映しているわけである。したがって、このような貝塚を調べることが、文献もなにもない日本の原始社会のあり方を明らかにするもっとも有力な方法であるにもかかわらず、これまで日本ではこのような貝塚を全部発掘して調べたという例は一つもない」といっている。

また紙上に伝えるところでは最近焼失した日光東照宮の鳴竜で知られる薬師堂の再建に3億円を計上し、平泉中尊寺の光堂の修復にはそれ以上の金額が投入されているのである。これに対して埋蔵文化財の保護行政はあまりにも立ち遅れているのではないか。

イタリアのポンペイ遺跡は火山灰でおおわれたが、日本のポンペイは貝塚で隠されている。しかしともに日本のみならず世界的な埋蔵文化財なのである。千葉県が誇る唯一の日本一の埋蔵文化財は加曽利貝塚以外にないことをこの際、じゅうぶんに理解して、その保護対策には官民一致し、強力に推進することこそもっとも必要な処置ではないだろうか。

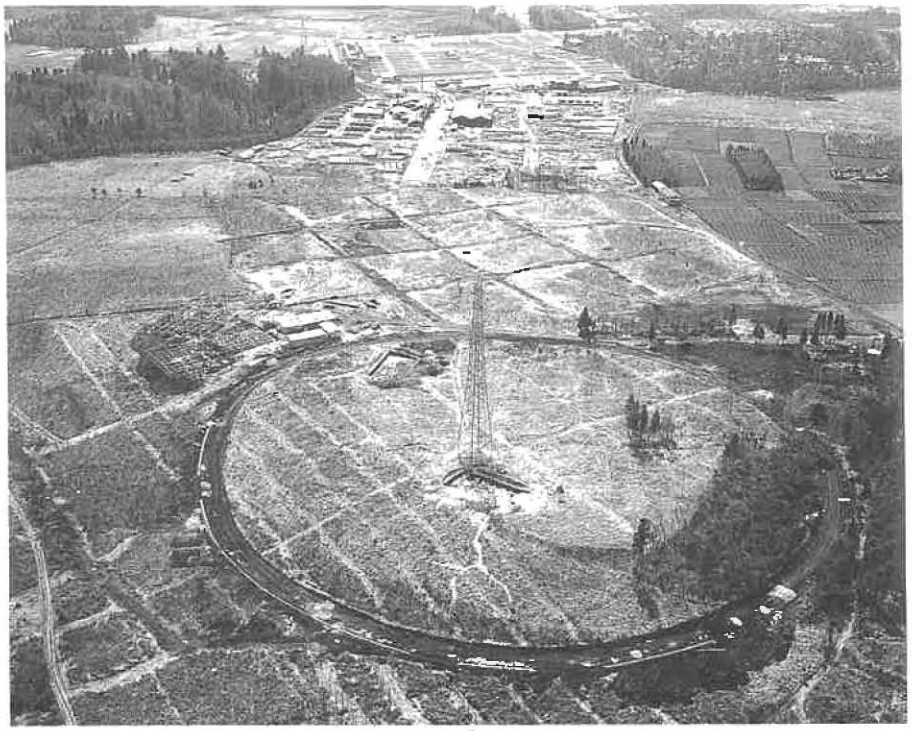
千葉日報新聞　昭和38年8月4日　第4面に掲載

前掲の「加曽利貝塚の保存」および本稿「日本一の加曽利貝塚」は、千葉日報社の御厚意により、掲載することが出来ました。ここに記して、深く謝意を表します。



加曽利北貝塚Ｃトレンチ　昭和41年度

加曽利南貝塚トレンチ発掘調査　昭和39年度



加曽利貝塚博物館建設風景　昭和40年度